

平成 24 年 度



人権啓発シリーズ集

公益財団法人 高知県人権啓発センター



はじめに

この冊子は、平成二十四年六月から平成二十五年一月まで高知新聞に掲載しました人権啓発シリーズ七回分を編集したものです。

さまざまな人権問題の解決を図るための啓発資料として、ぜひ、多くのみなさまに活用していただきたいと願っております。

平成二十五年三月

公益財団法人 高知県人権啓発センター

理事長 中澤彰穂



目次

被差別者のパートナー	
一、心豊かな国民を目指して	栗原美和子 1
人間関係の極意	
二、プラス側面を引き出す	浅田 梢 5
いじめられた側は悪くない	
三、いじめで受けた心の傷とその対処法	倉成 央 9
障害者の人権	
四、配慮に名を借りた差別	且田恭介 13
こどもの人権	
五、あなたは大切な存在	杉本園子 17
医療法人精華園海辺の杜ホスピタル心理室室長	
女性の人権	
六、配偶者暴力を考える	矢野川 禎子 21
高知県女性相談支援センター 所長	
子どもの権利	
七、「できない」を言わない	内田 美智子 25
助産師・思春期保健相談士	

被差別者のパートナー

(平成24年6月20日掲載)

心豊かな国民を目指して

栗原 美和子

くりはら・みわこ氏

福岡県生まれ。1987年フジテレビ入社。プロデューサーとして数々のヒットドラマを生み出す傍ら、脚本・小説等、執筆活動も精力的に行っている。テーマは常に「ラブ&ビューマン」。ドラマの代表作「ピュア」「バージロード」「ムコ殿」「人にやさしく」「東京湾景」など。2007年、猿まわし師の村崎太郎氏と電撃結婚し、世間を驚かせた。現在は、「共同テレビ」と「女性チャンネルLaLaTV」へ出向中。

2007年、私の第二の人生がスタートした。大学卒業後、フジテレビでドラマプロデューサーとして生きてきた私が、42歳で、被差別者のパートナーとして生きていくことになったのだ。

きっかけは、村崎太郎との出逢い^あ、そして結婚。猿まわしコンビ“太郎次郎”の村崎太郎を題材にドラマを作り、直後に彼からプロポーズを受け、電撃結婚となった。結婚というのは誰にとっても「第二の人生の始まり」と思われるかもしれない。

でも私の場合は、そうではない。結婚相手が被差別部落出身者であること、だからこそ彼のパートナーになりたい、そう願ったの。プロポーズ承諾だった。「彼と結婚するということ、日本が背負ってきた哀^{かな}しい歴史と結

婚するということ」「私たちが一緒になることによって日本に潜在する醜い差別と闘うこと」を意味していたのだ。

入籍から半年後に、私から彼に提案した。「あなたがいまだ公にしていないうあなたの本当の人生を、私小説という形で私に書かせていただけませんか？その出版をもつて、あなたは世の中に問いかけていただけませんか？」と。つまりは、「カミングアウトすることによって、この差別問題を解決に導いていきたいと思います」と投げ掛けたのだ。それは私自身が、この問題の渦中の人となることを意味していた。夫婦にとって、人生最大の決意の瞬間であった。

これが、とてつもなく勇気の要る決断だという事実、この問題の全てがある。日本人

の心の中に、この問題をタブー視する気持ちが残っている以上、全く解決はされていないのだ。被差別者が「隠して生きていかなければならない」と思わされてしまっているこの現状こそが、未解決の証なのだ。

08年秋、「太郎が恋をする頃までには……」というタイトルの私小説を出版し、私は自ら、タブーの真ただ中に飛び込んだ。しかし、待ち受けていたのは厳しい現実だった。われわれは業界内で、「胡散くさい夫婦」「厄介な夫婦」「面倒くさいことを始めた夫婦」というレッテルを貼られたのだ。マスコミは、過去に受けた糾弾の恐怖を拭い去れておらず、部落差別問題に対して過剰な拒絶感を抱いていることを再認識させられた。

今振り返ると、その時期が最も苦しかった。

村崎太郎は、それまで以上に、この国に対して絶望感を抱くこととなったし、私も初めて、世間からの冷たい視線を浴びることとなったからだ。でも後悔はしていない。いや、してはいけない。誰かが動き続けなければ、日本人の差別観は変わらない。この部落差別を解決しなければ、日本人は成長しない。男女差別、障害者差別、格差社会、さまざまな問題の根源はここにある。部落差別から目を背けることは、日本人としての心の成長にストッパーをかけることに値するのだ。

だから、私たち夫婦は決して後悔してはいけない。「むしろ堂々と胸を張りいろんな差別で苦しんでいる人たちの代弁者となっていくべきだ」、そう新たに決意し、次のステップへと向かうこととなった。

その後、09年には、村崎太郎著の「ボロを着た王子様」、10年には夫婦共著の「橋はかかる」(全国学校図書館協議会の選定図書)を発表した。いずれも大ベストセラーには及んでいないが、私たちが歩みを止めないことに意義がある、と信じている。

さらには11年3月11日、東北地方を大きな哀しみが襲った際には、自然と足は被災地へと向かった。太郎次郎と共に、被災者に笑顔を取り戻していただくべく、猿まわしの慰問公演旅を続けた。ある日突然「弱者」となった彼らと正面から向き合うことが、われわれにできることだと思い、避難所や仮設住宅を訪ね続けた。

そして12年3月15日には岩手県大船渡市の市民ホールに約千人の被災者を無料でご招待し、

太郎次郎一門による大慰問公演を行った。あえて3月15日を選んだのには理由がある。「1年経^たった3月11日で終わりではありません。これからもわれわれ日本人は、東北地方の哀しみを忘れてはいけません」というメッセージを伝えたかったのだ。

そう、忘れてはいけない。目を背けてはいけない。日本人が本当の意味で心豊かな国民になるためには、まずは、哀しい現実と正面から向き合うこと、それを怠ってはいけないのだ。私は第二の人生で、そのことを日々学んでいる。

人間関係の極意

(平成24年7月21日掲載)

プラス側面を引き出す

浅田 梢

あさだ・こずえ氏

ガイアモーター株式会社COO。新潟市出身。現在、ガイアモーター株式会社にて【講師力養成講座】【共感プレゼンテーション講座】【女性キラキラ研修】など、研修講師として活躍中。『すべての人が、自分らしくある』ことを自らのミッションとし、受講生からは「ヤル気が出る場づくり」に対しての定評あり。「的確で、わかりやすい」「楽しい」「お手本にした」との声が多く、リピート率も高い。自分の「内なる声」をライフスタイルとする、【沖縄ワークショップ】など、幅広い分野での企画運営も手掛ける。

良好な人間関係を築く極意、それは「人のプラスの側面を引き出す」こと。人は本来、さまざまな側面を持っていて、状況に応じて使い分けているのです。

今、目の前でものすごい顔で怒っている上司も、家では優しく娘さんに語りかける「優しいパパ」でもあるのです。

特に日本人は、仕事とプライベートの顔を分ける傾向にあるため、いつも見ている側面だけでその人を判断しがちになります。けれど、それだけではもったいないと思いませんか？

数ある側面のうち、あなたが目の前の人の「どの顔を引き出すか？」がポイントです。

私自身、ある体験がキツカケで、そう思うようになりました。私は以前、出身地である

新潟のIT企業に5年間勤めており、パソコン片手に全国を飛び回り、システムのデモンストレーションをする担当でした。職場には、いわゆる「職人肌」のシステムエンジニアが多く、先輩のMさんもそんなタイプの一人でした。ある時、Mさんと2人で、車で東北へ出張することになります。東北への道のりは片道7時間。車移動という密室状態の中で、どう過ごしたらいいのやと、不安な気持ちで当日を迎えました。話し掛けても、余り目を合わせてくれないMさん。気まずさに押しつぶされそうになりながら、新潟を後にします。予想通り、車中の会話はぎこちなく、私は当たり障りのない仕事の話で、必死で場をつなぎます。時計を見ると、まだ1時間……。そろそろ限界を感じてきたころ、思い切って

私はMさんに仕事以外のことを聞いてみたのです。「Mさん、仕事以外ではどんなことが好きですか？何か好きなこと、ありますか？」と。そうしたら、思いもよらない展開になりました。Mさんの表情が一気に変わったのです。彼は実はスキーマの達人で、夏には毎年ニューヨークランドへ行き、ヘリコプターから雪山を駆け降りる程の腕の持ち主。その時の雪山の美しさ、ヘリコプターから新雪に飛び降りる瞬間の爽快さを、泉が湧き出るようにありありと話してくれたのです。

私は、初めて聞くMさんの世界観にグッと引き込まれ、時がたつのも忘れ楽しい時間を過ごしました。そして気付けば、東北に到着。私が今まで見ていたMさんとは全く違った顔が、そこにありました。これがキツカケで、

私はMさんへの苦手意識はなくなったのはもちろんのこと、彼はその後において、私の仕事を強力にバックアップしてくれるようになりました。今まで以上に頼れる存在になったのは、言うまでもありません。

この出来事を通じ、今まで自分が見てきたMさんの姿は、本当に一面でしかないことに気付かされました。とはいえ、彼は誰にでもそういう顔を見せるのではなく、例えば「気難しい奴」として接してくる相手には、やはり「気難しい一面」で対応しているのです。

「他人は自分の鏡」と後にコーチングで学びますが、自分がどう接するかによって、こうも人間が違って見えるものかと、その奥深さに興味を持つきっかけになった出来事でした。そして、興味が高まるとともに職場での人間

関係も飛躍的に改善していったのです。

ここで大事なことは、「先入観を一度脇に置いてみる」ということ。もしそれができたとしたら、一人一人が粹にとらわれない、もつと「自分らしい生き方」ができるようになります。自分らしい生き方を大事にすることこそ、私たちが本来持っている人権を守ることにもつながるのではないでしょうか。自分の色眼鏡は、自分では気付かないと言います。もしかしたら、自分の色眼鏡で、自分自身生きづらくしてしまっているかもしれません。色眼鏡を脇において、人のプラスの側面に焦点を当てる、これが良好な人間関係を築く極意です。

いじめられた側は悪くない

(平成24年8月23日掲載)

いじめで受けた心の傷とその対処法

倉 成 央

くらなり・ひろし氏

1963年生まれ。(株)メンタルサポート研究所代表取締役。メンタルヘルスコンサルタント、心理カウンセラー、臨床心理士。企業のメンタルヘルスマネジメント導入・運営のコンサルティングやメンタルヘルス研修などを行う傍ら、カウンセラーの育成も行っている。単にリスクマネジメントの一環としてではなく、生産性向上を実現するメンタルヘルスの導入・定着を目指して活動している。またカウンセリングは、人気が高く、今も半年待ちの状態である。主な著書「ゆるしのメッセージ」 「うつにならない言葉の使い方」(他)

最近、いじめを苦にした自殺が新聞に取り上げられています。いじめのニュースを見るたび、身につまされるような思いがします。いじめの問題はこの世からなくなつてほしいと願いますが、残念なことに、人が集団で生活する以上、なくならないものとも言われています。私は心理カウンセラーとして、いじめを受けて、心の傷を負つてしまった子どもの問題解決を手伝うことがあります。いじめを受けて、死にたくなる、学校に行かなくなる、無口になる、自信喪失するなどは、いじめで受けた心の傷が原因になっているのです。

ある小学校5年生の男の子は、いじめを受けて学校に行けなくなっていました。担任の先生と母親にカウンセリングに連れてこられた彼は、私と目を合わせず下を向いたまま、

全くしゃべりません。私が、「今日は何と言われて来たの?」と尋ねても、返事はなし。母親の話では、いじめを受けて以来、あまり誰ともしゃべらなくなったとのこと。私が、「今日は、僕と話したくない?」と尋ねると、彼は目を合わせないまま、静かに首を横に振りました。「大人たちはあまり信頼できないのかな?」と尋ねると、彼は今度は首を縦に振りました。「どうして大人は信用できないの?」との問いかけに、彼は初めて小さな声でポツリと言葉を發しました。「だって、いじめを受けたほうも悪いって言うから」。「あのね、いじめはする人が悪いんだ。いじめを受けた側は百パーセント悪くないんだ」。私は大きな声で、そして真剣に彼に伝えました。その言葉で彼は、初めて顔を上げ、私の目を

見て、「本当に？」と確認しました。「本当だよ！いじめを受けた人は絶対に悪くない」。大きな声で繰り返しました。

その言葉を聞いて、彼の目は輝き、それから私の目を見ていろいろ話してくれました。

いじめの詳細について、いじめを受けた経緯、いじめの内容、今の気持ちなど。しばらくして相談室に入ってきた彼の母親は、彼が私に懸命に話している姿を見て驚きました。「誰ともしやべろうとしなかったのに、どうしてこの子はしゃべるようになったのでしょうか？」。私は彼に、いじめを受けた側は悪くないという言葉传达了ただけです。

彼の周りの大人たちは、彼に「いじめを受けたお前が悪い」と言ったわけではありません。ただ、彼がいじめのことを母親と担任の

先生に告げたとき、「そんなことをされて、何故^{なぜ}言い返さなかったの？」と言われたのです。知っておいていただきたいのは、いじめを受けて心が傷ついた子どもには、この言葉は「お前が悪い」と聞こえるのです。

いじめを受けた子どもの多くが、抵抗できない自分、いじめを受ける自分を情けないと責めています。いじめでつらい思いをした上に、その自分を自分で責めているのです。その上に大人から、「お前が悪い」と聞こえてしまう言葉を言われてしまうと、傷ついた心を更に傷つけ、心を閉ざしてしまいます。これはいじめの二次被害だと考えています。

そもそも、いじめを受けた子は本当に悪いのでしょうか。なぜいじめられるのか、いじめを受けた理由を聞いてみると、運動ができ

ない、暗い、何も言い返さないなどの理由が返ってきます。これらは悪いことでしょうか。これらは、単に性格・個性であって何も悪いことではないのです。いじめはやはりする側の問題です。いじめを受ける側は決して悪くないのです。

「いじめを受けた子どもから相談を受けるとき、大人たちはどう話を聞いてあげると良いのでしょうか？」「どうやって話を聞けば、もつと信頼して話をしてくれるでしょうか？」という質問を受けます。まずは最初に、いじめの相談を受ける大人側が、いじめを受けた側は悪くないという気持ちを持って話を聞くことが大切です。できれば、いじめの相談を受けたとき、それをハッキリと言葉にして伝えてあげましょう。その言葉で、「自分は情

けない」と自分を責めてきた子どもはどれほど救われるでしょう。

いじめを受けた子どもが心の傷を負ってしまい、最後には子どもの性格や命にまで影響を与えてしまう、こういう事態を避けるため、子どもがいじめの相談を受けたときの大人たちの対応は重要です。いじめ問題に早期対処し解決する、そのためには大人たちがいじめを受けて傷ついた子どもの味方として寄り添う姿勢が必要なのです。

障害者の人権

配慮に名を借りた差別

(平成24年9月21日掲載)

且 田 恭 介

かつだ・きょうすけ氏

1975年、高知県生まれ。簡易食品容器製造大手・(株)エフピコの特例子会社である(株)ダックスに入社から20年。多くの知的障害のある従業員と日々向き合い続けている。現在(株)ダックス四国、(株)ダックス佐賀の統括本部長を務める。(株)エフピコの特例子会社は全国で5事業所、約110人の障害者を正社員として雇用。その生産力と仕事に対する意欲は、健常者のみを雇用するグループ内他事業部と比べてもトップクラスを誇る。

うだるほどの猛暑日が続く今年の夏。作業着の背中を汗だくにして、笑顔で工場へ駆けていく知的障害のある従業員たち。工場作業者には厳し過ぎるこの季節を、今年もまた当たり前のように欠勤者ゼロで乗り越えられる。それが私の勤める会社・株式会社ダックス四国。

従業員にN君という重度知的障害の方がいる。字は書けない。数字が読めない。左右が分らない。入社当初は5分間も立っていられなかった。それでも彼なりに日々働くことに取り組んでいる。一昨年の社員旅行でのこと、みんなでテレビを見ながらくつろいでいた時、ちょうどテレビでは「五体不満足」の著者である乙武洋匡さんの特集が放映されていた。ふと隣に座っていたN君を見るとポロ

ポロと涙を流している。「この人、かわいそう。手も足もない」とN君はつぶやいた。私はこの言葉を聴いた瞬間の自分自身の感情に衝撃を受けた。それまでの私は、どんな重度障害のある従業員であつても、その一人一人と大人として対等に向き合っていると自負してきた。でもその時は「乙武さんは大学に行つて本も出版して、結婚もしている。けれどN君は…」という何とも言えない思いが胸をよぎつたのだ。もしかして、彼の障害のレベルからすれば、彼の實力はここまでだろうという線引きを、私は無意識におこなっていたのではないか？しかし、かわいそうとつぶやいたN君の心の中では、先天性四肢切断という障害の乙武さんは支えるべき人だったのだ。

人はみな誰かを支えたいし守りたい。競い

たいし達成をしたい。期待しないのも責任を与えないことも、もつと言えは負けないように配慮することも、余計な苦勞をかけまいとすることも、それは線引きという名の差別なのだ。「無理をしなくていいよ。出来るだけでいいよ。ありのままでいいよ」、よく福祉に携わる方々は彼らにそう言う。けれど、それは配慮や支援という名を借りた限りなく差別に近いものと感じる。誰だって、努力をしたい。その先にこそ達成感があるのではないか？ 私たちが本当にすべきことは、無理をさせないことではない、無理をさせ過ぎないことだ。

その事をキツカケに私の彼に対する向き合い方は激変し、それにより彼は、彼を知る支援者たちが奇跡と言う程に社会人としての成

長を見せ始めた。

「彼らが、出来るか出来ないかを決めるのは、障害の種別でも程度でも特性でもない。もちろん教育者や支援者、保護者でもない。彼らが出来るようにならないのは、彼らと向き合う私たちの出来るようにする想像力と執着心が足りないからだ。自閉症だから急な予定変更に対応できない、ではない。重度障害者だからこの作業は無理だ、ではない。自分たちが出来るように導けないことを障害のせいにしてはいけない」。そこまでの思いを持つて、彼らを生産者、消費者、納税者へと導いていく。彼ら自身が、彼らよりはるかに配慮の必要な方々への支援を生み出す担い手となること。そのことこそが、彼らと、そして私たちを含む社会を当たり前の形にする大前提

なのではないだろうか？

定期通院などで欠勤をする日の朝「僕が休むと会社がつぶれる…」と泣きながら電話をしてくる彼ら。生産目標を達成したと発表すると、ガッツポーズをして喜ぶ彼ら。健常者だけの、どの他事業部より欠勤率が低いこの事業所。どこよりも愛社精神が強い私たちのチーム。その一つ一つに、障害者だとか健常者だとか、支援される人とする人だとか、そんな意味のない線引きが見えなくなっていくのを感じる。

現在の日本で障害者と言われる方は約744万人。そのうち精神・知的障害と区分される方が約378万人。その数字だけを見ても、例えば高知県民（約75万人）のおよそ10倍に相当する数字である。それだけの人数比率を持つて

いる彼らを、障害者として健常者と区別する理由がどこにあるのだろうか？

それが今の日本で、当たり前前の社会なのだ。彼らを、もちろん私をも含めた日本。そんな当たり前前のことを、特別な観点から議論したり、さも大きな問題のように取り扱うことが、今の日本の現状にあるということは真摯^{しんし}に受け止めながらも、これから私たちの出来ることを、彼らを含めた私たちだから出来る次の一步を、またこの高知から始めていきたい。

【参考資料】「平成24年版障害者白書」「高知県推計人口調査（平成24年8月1日）」

こどもの人権

あなたは大切な存在

(平成24年10月24日掲載)

杉 本 園 子

すぎもと・そのこ氏

1958年、高知市生まれ。関西学院大学卒業。臨床心理士。芸西病院等勤務の後、92年より医療法人精華園海辺の杜ホスピタル勤務、現在心理室室長、棧橋みどりクリニックス兼務。96年より高知県スクールカウンセラー兼務。高知県臨床心理士会会長、日本心理臨床学会代議員。こどもから高齢者までを対象に不登校、適応障害、ストレス関連障害、うつ、アルコール依存症、統合失調症などのカウンセリング、心理療法、心理支援に携わる。

大変悲しく痛ましいことですが、2011年度の全国の小中高等学校におけるいじめは約7万件、暴力事件は約5万6千件、自殺は200人、児童相談所での虐待相談は約6万件、死に至った虐待は39人でした。

こんな話をしてくれた方がいました。「幼いころから親から暴力を受けていたけれど、それは自分が悪い子だからだと思っていた。親も幼いころ、その親から暴力を受けていた。それが普通の家庭と思っていた。だから、誰にも打ち明けたことがなかった。いつ死んでもいいと自暴自棄になり、人のことを思いやる余裕なんかなかった。やがて非行に至り、それに介入してくれた大人との真摯な出会いをきっかけに、生まれ変わることができた」と。

虐待を受けている子は、自分が悪いと考えやすく、自ら助けを言葉で訴えることができないため、周囲の気付き・介入が必要です。なかには非行に至る子もいます。また、親も癒やされていない傷つき体験を持ち、自分のことで精いっぱいでも必要としていることに気付くことができない状況です。こどもと親の両方に支援が必要になります。真剣に大切に思っただけで向かい合ってくれれば本人が感じられる出会いが何より必要です。

いじめは1人に対し複数で起こることが多く、いじめられた子は、孤立を感じ、無力感や不安感、不信感でいっぱいです。自分が、いじめの対象になっていることを意識すると自体がたやすく、なかなか言えないと教えてくれた子がいました。

無視され、「汚い・臭い・死ね」と言われ、唾を吐きかけられ、石を投げられ、耐えていた子。携帯電話を悪用したいじめで不登校になった子。葬式ゲームやプロレスと称して遊んでいるかのように見せかけたいじめで、「助けて」と言っても取り合ってもらえず、自分を守るためにナイフを持っていた子。いじめをする側、される側には、いじめの感じ方に温度差があること、いじめられている側は孤立、不安、不信を感じており、訴えづらいことを理解した対応が必要です。

現在日本は、競争原理が働くなか、親の労働環境の悪化により、精神的・肉体的に疲弊し、家族団欒だんらんの時を持てない家庭が多くみられます。パチンコ・飲酒・仕事などへの依存、夫婦間暴力・暴言など、自分自身の欲望や苦

悩への対処に忙しく、本当の自分を見失い、ゆとりがなく、こどもが必要としているものやことに、気付くことができません。

家に帰っても食事がなく、リングをかじって過ごしていた子。コンビニ弁当で夕食をします子。幼いころから、楽しい思い出や大切にされたという記憶がない子。そんな寂しい日常を、黙々と過ごしているこどもたちが、身近にいます。こんな状態が続くと、こどもは、自分がかけがえのない存在だという感覚を失ってしまいます。

こどもは愛されることによって、愛することを学びます。親または養育者に愛され、信頼できる体験を通して、自分を信じ、社会を信じ、人と親密になることができるようになります。口だけでなく、お手本を示してくれ

る親や大人が必要です。

こどもは、守られ、安全であると感じると、本来持っている力が現れて、創造的になります。こども時代の自由で安全で楽しい遊びは、後の人生の基礎となっていきます。

こども時代に、怒りや深い悲しみなど傷ついた感情が抑制されそのまま大人になると、自分なりにベストを尽くしていても、こどもの欲求に気付けないことがあります。悲しい連鎖が生じないように、大人の自分が、心の奥の傷ついたこどもの「認めてほしかった。怒っていた。寂しかった。悲しかった…。」と言う声に気付き癒やし支えましょう。やがて、余裕をもって、自分やこども、他者、社会、世界を見ることができるようになるでしょう。

定期的に自分をみつめ直し、本当の自己を取り戻し、こどもたちと気持ちが通い合う時間をつくり、こどもも大人も大切にされている実感を持てるようにしましょう。

教育・福祉・経済・産業・労働など社会全体が、こどもに影響を与えます。幸福をみんなが実感できる社会・働き方・教育等を考え創っていくのは、私たち大人の責任だと思います。

【参考資料】「(文部科学省) 平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」「(厚生労働省) 児童相談所での児童虐待相談対応件数(報道発表資料)」「(警察庁) 少年非行等の概要」

女性の人権

(平成24年11月14日掲載)

配偶者暴力を考える

矢野川 禎子

やのがわ・ていこ氏

1955年宿毛市生まれ。77年高知県に採用される。県男女共同参画・NPO課長を経て、2008年から県女性相談支援センター所長。女性からの悩み相談や県内唯一の配偶者暴力相談支援センターとして、配偶者からの暴力に関する相談、被害者の保護・支援を行っている。

今日も夫の暴力（DV）に悩む女性からの電話が入ります。

平成23年度に全国の配偶者暴力相談支援センターが受けた相談は、8万2099件で、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が全面施行された平成14年度と比べると2倍以上に増加しています。

高知県でも579件の相談があり、増加の傾向にあります。その要因は、法が制定され、DVは犯罪であり重大な人権侵害であるとの認識が広まり、これまで我慢を強いられてきた被害者が救済の声を上げ始めた結果と言えます。また、最近では暴力を受けている被害者を心配する家族や友人からの相談も増えています。

暴力には身体への暴力だけでなく、大声で

怒鳴る、暴言を吐くなどの精神的暴力、さらには、性的行為の強要や避妊に協力しないなどの性的暴力があり、被害者の多くは女性です。

体中があざになるほど殴られたり、首を絞められたりして、「殺されるかと思った」ほど怖い思いをしても、被害者は事件化を望まず、多くは身内の恥として水面下に隠されます。

男女が出会い、一緒になった時には、共に幸せになることを願っていたのに、いつの間にか夫婦の間に「力」による「支配する者」と「される者」の関係が作りあげられ、ささいな事がきっかけとなって暴力が始まります。

被害者は、初めのころは反論もしていたが、次第に口で言い負かされ、最後には逆らえなくなります。DVがある家庭では家事・育児

は、妻の役割とする意識が強固で、加害者は「夫の言うとおりにしない妻が悪い」と責任を転嫁し、「分からせるためにはやむを得ない」と暴力を正当化します。

また、妻が友人や実家と交流することを禁止したり、生活に必要なお金を渡さない、借金をさせるなどして、被害者を経済的にも精神的にも追い詰めていきます。それでも妻は、いつか夫が変わるかもしれないとの期待を捨てきれず、迷い、混乱するため、周りと思うほどDVから抜け出すことは容易ではないのです。

一方、DVは子どもの心身の発達にも影響を与えます。子どもは、両親のいさかいの声や物が激しく壊れる音、母親の悲鳴などを嫌でも見聞きし、子どもは自分のせいで両親が

けんかしているのではないかと思い込んでしまふことがあります。不安な気持ちから、いつも親の顔色を見て行動したり、親と同じような暴力的な行動を取ることもあります。

また、乳幼児には言葉や身体の発育の遅れとなつて表れることもあり、子どもへの影響を心配して、家を出る決心を固める母親も多いのです。孤立し、誰も頼れない被害者は切羽詰まつて、警察や配偶者暴力相談支援センターに保護を求めてきます。配偶者暴力相談支援センターでは被害者の安全確保を最優先に行い、落ち着いたあと、今後の生活について、一緒に考えていきます。

引き続き身体への暴力が心配される場合は、裁判所へ保護命令（※）の申し立てをします。被害者の申し立てが認められ、命令が発

令されると、不安で暗かった被害者の顔が喜びであればと明るくなります。また、子どもは安全な施設の中で遊んだり、勉強したりして、暴力のない「普通の生活」になれてくると、無表情だった子どもに笑顔が戻り、子どもらしい甘えもでてきます。赤ちゃんでさえも、静かで安心して眠れることで、すすくと育っていきます。

こんな母親と子どもの変化を目の当たりにすると、「安全な環境の中で、安心して過ごせる」ということの重みをあらためて認識させられます。

そして、DVは女性の尊厳を傷つけるだけでなく、家庭をも崩壊させます。私たちは、「このくらいなら許される」とDVを容認し、見過ごしていることはないでしょうか。

県では、誰もが自分らしく笑顔で暮らせるために、暴力を許さない社会づくりを始めとする取り組みを関係機関とともに進めています。また、多数の民間事業者や女性団体などの協力も得て、被害者を物心両面から支え、安定した生活が送れるよう応援しています。

今年も「女性に対する暴力をなくする運動期間（11月12日～25日）」中に、DV防止の啓発活動が計画されています。DVについて、みんなで考える機会となることを切に願っています。

※保護命令Ⅱ被害者へ近づくことを禁止する接近禁止命令（6カ月間）、加害者が住宅から退去することを命ずる退去命令（2カ月間）などがある。

子どもの権利

(平成25年1月23日掲載)

「できない」を言わない

内 田 美智子

うちだ・みちこ氏

助産師・思春期保健相談士。1957年大分県竹田市生まれ。76年大分県立竹田高校卒業。79年国立熊本病院附属看護学校卒業。80年国立小倉病院附属看護助産学校助産師科卒業。福岡赤十字病院産科勤務。88年福岡県行橋市に帰省し、産婦人科医の夫とともに内田産婦人科医院を開業。2004年九州思春期研究会設立。事務局長・文科省委嘱。福岡県性教育実践調査研究事業委員(06年3月まで)。08年福岡県社会教育委員(09年3月まで)・福岡県家庭教育アドバイザー。

子どもたちは生きるために産まれてきます。愛されるために産まれてきます。誰かを愛するためには産まれてきます。一身に愛を受けて育った子どもは人を愛することができます、自分を大切にすることもできます。そして「あの人を悲しませてはいけない」と自分を愛してくれた人のことを思いながら生きていくことができます。

「子どもの権利条約」、1989年の第44回国連総会で可決・採択され、90年に発効されました。前文と本文合わせて54カ条で成り立っています。日本ではこの国連の採択から遅れること5年、94年にこれを批准しました。これに加えて二つの選択議定書（11子ども
の売春、買春及び子どもポルノに関する選択
議定書 211武力紛争への子どもの関与に関

する選択議定書）が2000年に採択され、これも日本は04年と05年に批准しています。批准したということは、私たち大人はこれを守らなければならないということです。

この「子どもの権利条約」が採択された時、日本では「そんなことわざわざ批准しなくても日本の子どもたちの基本的人権は十分守られているではないか」という意見があった。

その権利とは、四つの柱でできていて①生きる権利②守られる権利③育つ権利④参加する権利で、子どもが生きていくために保障されなければならないことが細かく記されています。「生きること、寝ること、食べること、健康に過ごすこと、遊ぶこと、学ぶこと、あらゆる差別を受けないこと、そして愛されることは子どもたちにとって絶対保障されなけ

ればならない権利ですよ」と書かれています。これを批准している日本で本当にこの権利が保障されているでしょうか。子どもたちは守られているでしょうか。

戦争もなく、経済的にも豊かな国と言われ、教育も行き届いて、捨てるほどの食料もあり、何の不自由もなく暮らせているはずなのに、今子どもたちを取り巻く環境はあまりにも厳しいです。この子どもたちが保障されなければならない権利を、子ども自ら放棄する子は一人もいません。食べることも寝ることも遊ぶことも愛されることも皆、大人が奪うのです。大人がつくった大人のための便利な社会で、子どもたちの生きるための権利が奪われています。ちゃんと食べさせられていない子ども、十分な睡眠が取れていない子ども、我

を忘れて思いっきり遊んでいない子ども、親に愛されていない子どもはたくさんいます。全て育てる大人の責任です。

「どうせ私（俺）なんか」「産まれて来んほうがよかった」「産んでくれって頼んだ覚えねえし」「生きててもしょうがないし」「死んだほうがいい」子どもたちの口から出てくる言葉はあまりにも悲しすぎます。でも思春期になった子どもたちがそんな言葉を口にします。

子育ては親の犠牲の上に成り立っていきます。育てる大人に手をかけられて、目をかけられて、愛されて、ひたすら守られて育っていくのが子どもです。便利なものを作り続け、手間暇を惜しんで自分の時間を守ろうとする大人が子育てをしようとすると、子どもの欲

求は満たされないまま育っていきます。

そんな子どもたちが思春期になり、不満を口にしても何の不思議ありません。欲求を満たすためにいろいろなサインを出します。

そのサインは大人には、「問題行動」といわれる困った事象です。でも子どもたちは困っていません。してはいけないことということとは分かっていますが、それを止めることはできません。やっと見つけた「居場所」ですから。そして「私を愛してくれた人」がいなかったことに気付いたのですから。親として大人としてしなければならぬことを、できるための理由を見つけてするしかありません。できない理由を探さないことしかありません。

「忙しい」「大変」「めんどくさい」だから「できない」を、子どもたちを見守り、育て

る側の大人は言わないようにしませんか？

平成24年度

人権啓発シリーズ集

平成25年3月

発行 (公財)高知県人権啓発センター
〒780-0870
高知県高知市本町4丁目1-37
TEL 088 (821) 4681
FAX 088 (821) 4440

印刷 西富騰写堂